正恵古墳群

福岡県糸島郡前原町大字瑞梅寺字正恵所在遺跡調査報告

前原町文化財調査報告書

第　2　集

1980

前原町教育委員会

正　恵　古　墳　群

福岡県糸島郡前原町大字瑞梅寺字正恵所在遺跡調査報告

前原町文化財調査報告書

第　2　集

本 文 目 次

Ⅰ 調査の経過……1
Ⅱ 位置と環境……1
Ⅲ 遺構と遺物……3
Ⅳ まとめ……10

例　　言

1. 本書は、福岡県糸島郡前原町大字瑞梅寺字正恵他に所在する正恵古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、昭和54年度に国・県補助を受け、前原町教育委員会が実施した。
3. 本書の遺構実測は、川村　博・樗木弘明・新開誉之・久原政基があたり、遺物実測は川村がおこなった。
4. 本書の執筆・編集は川村があたった。

序

土地開発が続く中で、開発と保存の調整を図りつつ、調査の結果を後世の人々に伝えていくことは重要な課題であると言えます。

この報告は、地権者前原町大字井原三苫新六郎氏の御理解と協力を得て行った、前原町大字瑞梅寺字正恵に存在する古墳群の発掘調査のまとめです。

この報告を研究資料の一つとして御利用いただければ幸いに存じます。

なおこの調査に際して指導助言をいただいた福岡県教育庁文化課柳田、児玉、池辺各氏、発掘作業に御協力くださった福岡大学生樗木、新開、久原氏、鹿児島大学生林　覚氏や地元の皆さんに対し、深甚の謝意を表します。

昭和55年３月31日

前原町教育委員会

教育長　豊　島　禮　蔵

I　調査の経過

正恵古墳群は、福岡県糸島郡前原町大字瑞梅寺字正恵他に位置する。

昭和53年11月に地主である三苫新六郎氏は、鶏舎建設に伴ない土取り作業中、石棺の出土を発見し、前原町教育委員会に連絡された。そこで、同教育委員会社会教育課前課長山崎信行・主査西　孝明は、当時、三雲遺跡群の調査中であった福岡県教育委員会文化課主任技師柳田康雄・技師児玉真一・池辺元明と共に現地踏査にあたり、丘陵上に石棺等の埋蔵文化財が包蔵することを確認した。

よって、前原町教育委員会は、三苫新六郎氏の協力を得、昭和54年度に、国・県補助を受けて、発掘調査を昭和54年８月２日より９月14日まで実施した。調査の関係は次のとおりである。

調査主体　前原町教育委員会

教育長　豊島禮蔵

社会教育課課長　野坂猷英　　社会教育課前課長　山崎信行

同　主査　西　孝明　　同　主事　川村　博(調査担当)

同　主事　岡本登美子

また、調査にあたって、樗木弘明・林　覚（鹿児島大学３年）・新開誉之（福岡大学２年）久原政基（同１年）の協力を得、瑞梅寺・井原・三雲行政区の婦人会には作業員として参加していただいた。

II　位置と環境

正恵古墳群は、背振山々系北麓の裾部に立地し、瑞梅寺川が西方に北流している。

本古墳群からの眺望はすぐれ、北方向に魏志倭人伝にみる「伊都国」の中心的な遺跡である三雲遺跡群・北東方向に史跡怡土城跡・北西方向に石ヶ崎支石墓群・平原遺跡群・銭瓶塚古墳の立地する曽根丘陵をみ、さらに北側には志登支石墓群が展望できる。以下、各遺跡の概要を記す。

志登支石墓群は、昭和28年に文化財保護委員会が調査し、支石墓４基・甕棺８基等が発掘され、磨製石鏃４本が出土している。また、中世の土師器・磁器等も出土し、史跡に指定されている。

三雲遺跡群は、青柳種信の記録である南小路甕棺出土地等で代表されるが、昭和49年度より発掘調査が福岡県教育委員会によっておこなわれており、縄文時代後期から歴史時代にいたるまで各時期の遺構が検出され、現在、報告書作成中である。

第1図　正恵古墳群位置図（1/25,000）

平原遺跡群は、昭和40年に調査され、主な遺構では、方形にめぐる溝に、埋葬遺構とされる割竹型木棺が検出され、鏡が40数面出土している。調査者である原田大六氏は弥生時代後期とされているが、異論がないわけでもない。報告書が待たれる。

銭瓶塚古墳は、帆立て貝式とされる前方後円墳で、家形埴輪等が出土している。

怡土城跡は、吉備真備によって築城された朝鮮式山城であり、日本古文化研究所（担当　鏡山　猛）によって調査され、昭和13年に指定をうけている。現在、史跡指定地買上げ・環境整備が継続中である。(第１図)

Ⅲ　遺構と遺物

(1)　概　要

東南より西北に派生する標高106～131.6mの丘陵上に６基の古墳が立地し、発掘調査は標高106～120m間に立地する３基の古墳を調査の対象とした。

地目は、調査時には竹林・雑木林であったが、以前、開墾され段々畑として利用されていたということであった。よって、地形測量時には、０・１号墳では傾斜変換線として墳頂部または墳裾部を確認できたが、２・３号墳については墳丘を確認できなかった。(第２図)

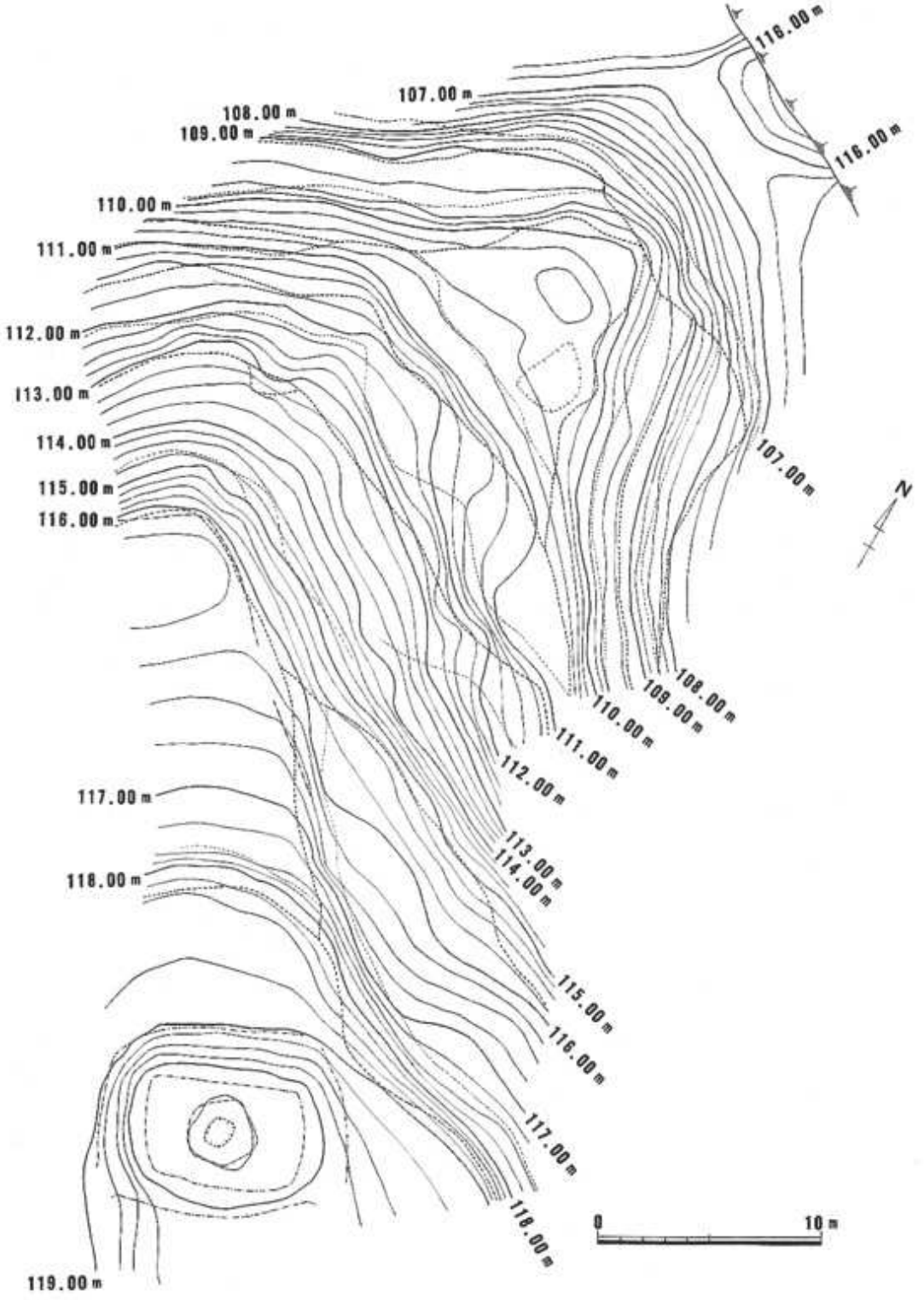
(2)　０　号　墳

墳　丘（第３図・図版２）

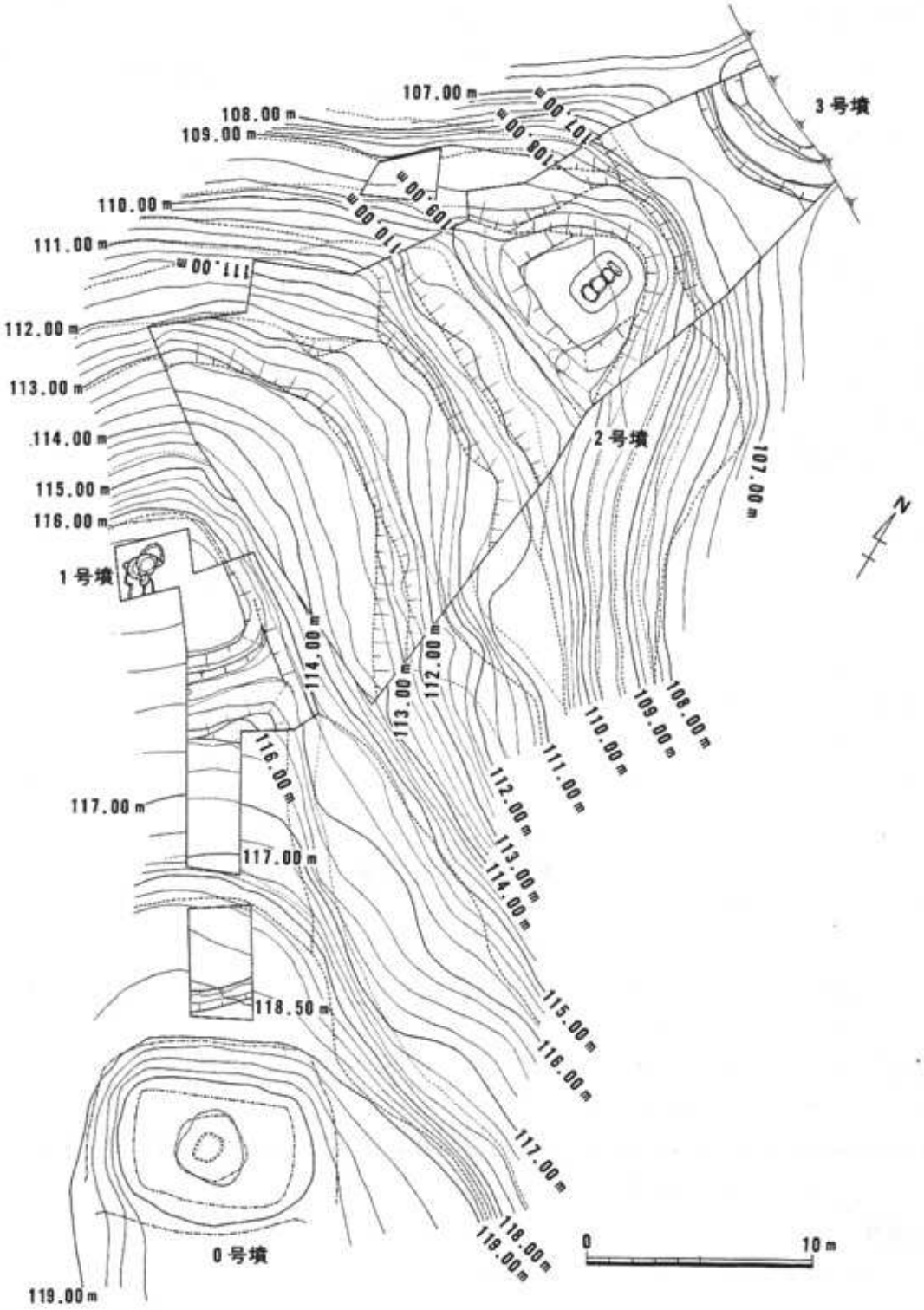
標高120m前後に位置し、方形墳を呈す。墳頂部は平坦で、中央で攪乱を受け、約4.7×約7.1mで、墳裾部は約8.6×11.1m、墳丘高は約0.3～0.95mである。墳丘表面上には、0.20～0.45m前後の魂石が露出しており、葺石と考えられ、方形墳の南辺両側には魂石が延びるようである。

周　辺　遺　跡

1．正恵古墳群　2．石ヶ崎支石墓群　3～8　三雲遺跡群　(3．南小路遺跡
4．鏡溝遺跡　5．川端遺跡　6．端山古墳　7．築山古墳　8．郡衛跡推定地)
9．平原遺跡群　10～11　曽根古墳群（10．先山古墳　11．銭瓶塚古墳）
12．大塚古墳　13．山北古墳群　14．高上古墳群　15．怡土城跡　16．金竜寺
17．道塚遺跡　18．古賀崎古墳　19～20　井原古墳群　21．感我子古墳群



第2図 正恵古墳群地形図(1/300)



第3図 正恵古墳群実測図(1/300)

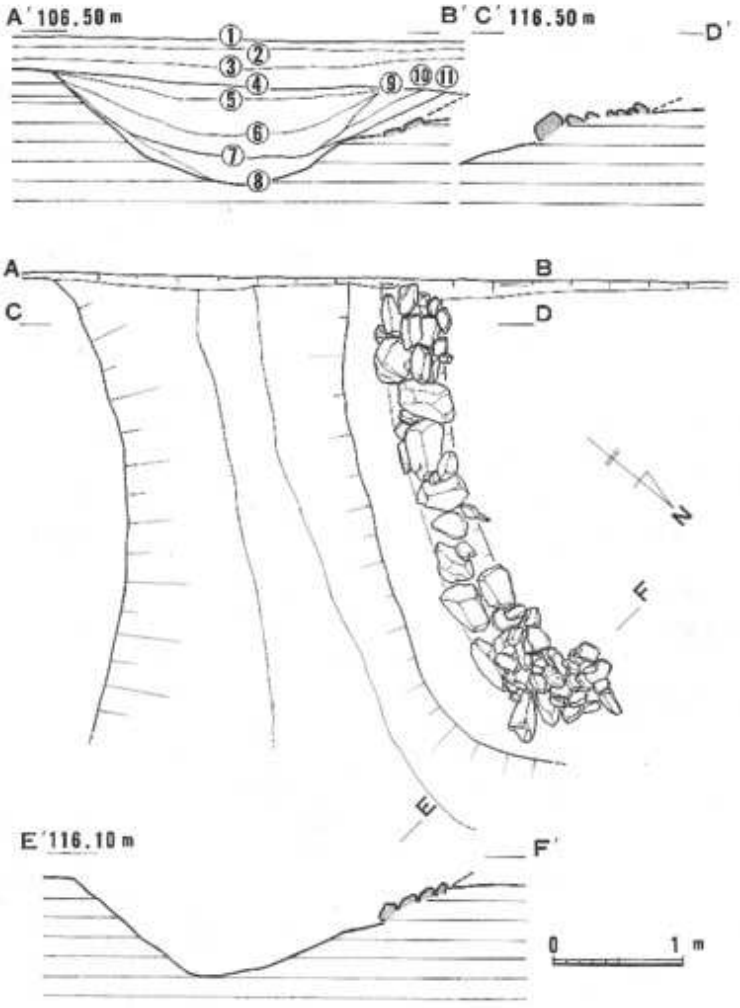
北側に、トレンチを設定し、周溝の確認に努めたが、確認できず、後世の溝を検出した。巾0.8～0.9m、深さ0.3m前後を測る。近世陶器小片が出土した。

(3) 1号墳

墳丘（第3・4図・図版3～5）

標高約116mに位し、地形測量時には北側一部を除き、傾斜変換線を確認できず、調査時に葺石等によって方形墳であることを確認した。

周溝巾約1.8～2.6m、深さ0.78mを測り、下層より黒色粘質土・暗灰黒色粘質土・灰黒色粘質土・黒色粘質土の順にみ、時節を変て埋ったと考える。



第4図　1号墳葺石実測図（1/60）

葺石は、南辺・東辺で認められたが、東辺は後世の攪乱・流失で動いているため除去した。葺石の石材は花崗石等で、大きさ0.15～0.45m前後の礫石で、周溝平担部より上部に墳丘にそい築かれている。

墳頂は、検出時には平担であり、葺石と共に後世に削平されている。

主体部（第5図・図版6上）

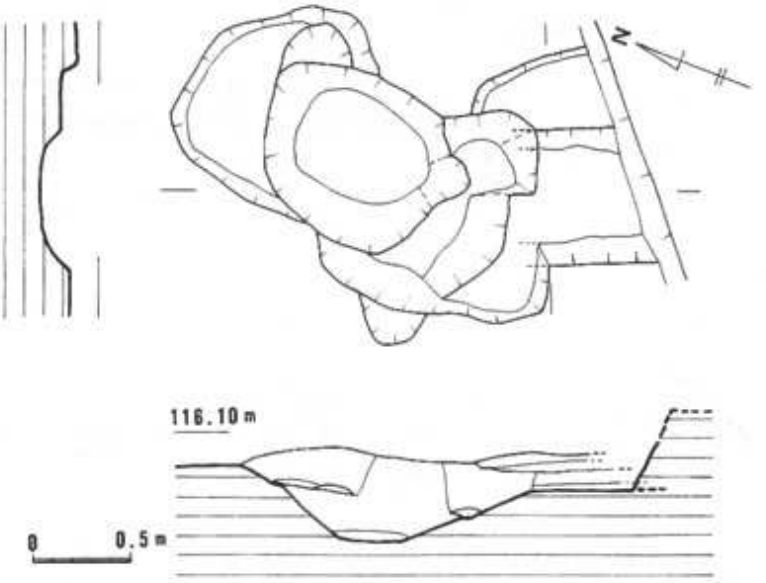
削平された墳頂部中央に不整形土坑を検出したが、土坑内埋土に微少の朱粒を認めた。また、横断面が舟底状を呈する部分もあるが、1号墳の主体部と考え難い。なお、土坑内より十銭玉の出土をみ、開墾の時期に対応する。

出土遺物（第　図・図版10）

高杯・壺が周溝の外側より落込んだ状況で出土した。

高杯（1・2）

1は口径16.2cm・現器高15.1cmを測る。杯部は直線的に外反し、脚部は中位がふくらみ、内面に横方向のヘラ削りをみる。胎土は精選され、黄灰色を呈し、精緻で良好である。2は現器高7.9cmを測り、調整・胎土等は1と同様である。



第5図　1号墳墳頂部土坑（1/40）

壺（3）　口径15.2cmを測り、口頸部は外反する。黄灰色を呈し、焼成は精緻である。

(4)　2　号　墳

墳丘（第3図　図版7）

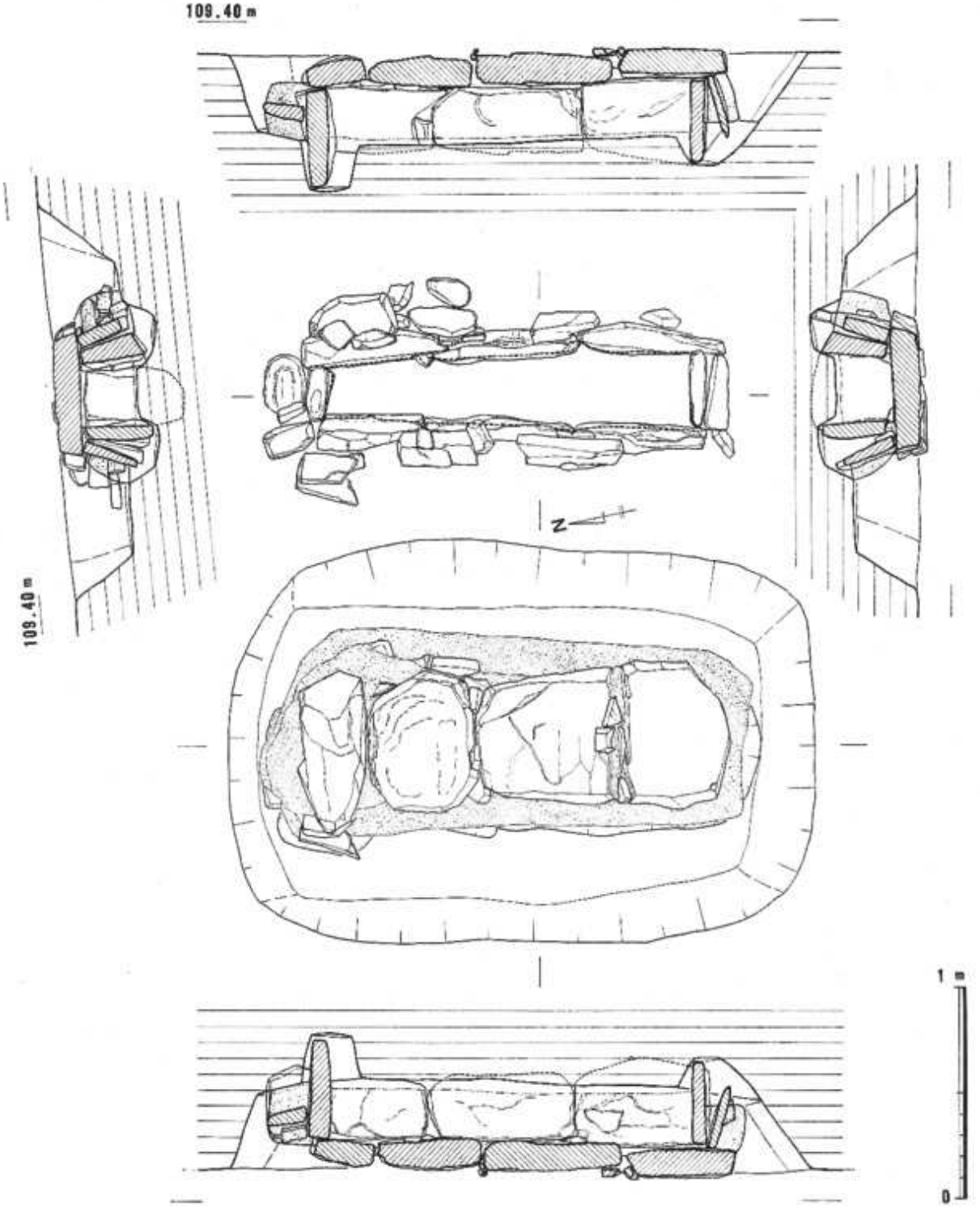
調査時に方形墳であることを認めた。北側は崩壊し、東・西側も半壊し、南側のみで、一辺約4.70mを測る。

周溝は南側のみで検出し、巾約1.7cmで、埋土は黒色粘質土で最下層である。周溝内より二重口縁の壺をつぶれた状態で出土した。

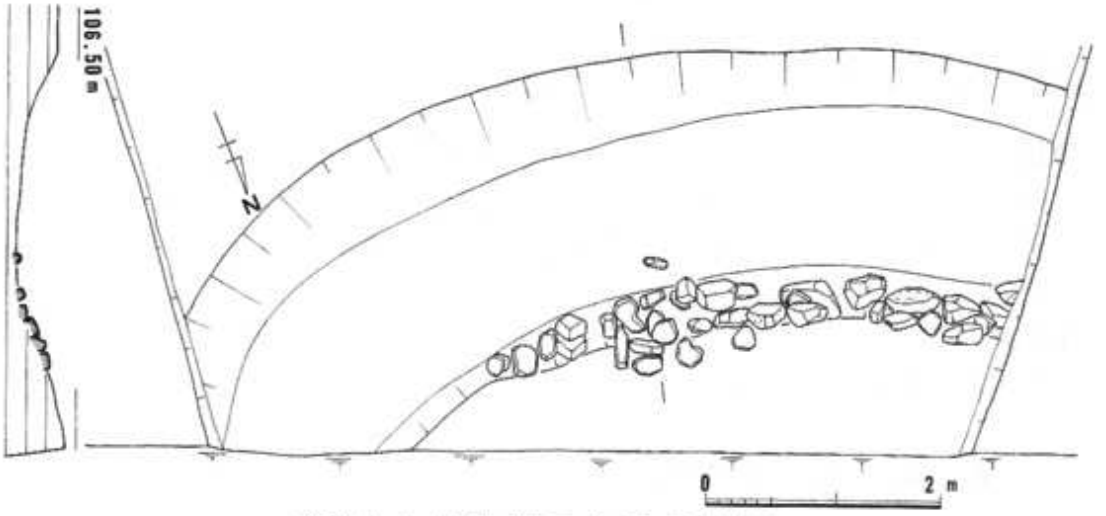
主体部（第6図・図版7～9）

墳頂のほぼ中央で、S12°50′Wを主軸とする石棺を検出した。掘方はほぼ長方形を呈し、約2.75×1.85mを測る。石棺石蓋は4枚で、粘質土で側板と共に目張され、頭位は南側である。棺の内規は全長1.71m・頭側巾0.46m・脚側巾0.26mを測り、粘土により枕が形づくられている。両側板は3枚ずつ、頭側小口2枚、脚側小口1枚で、両小口から頭側の側板より築造され、控積みが施されている。

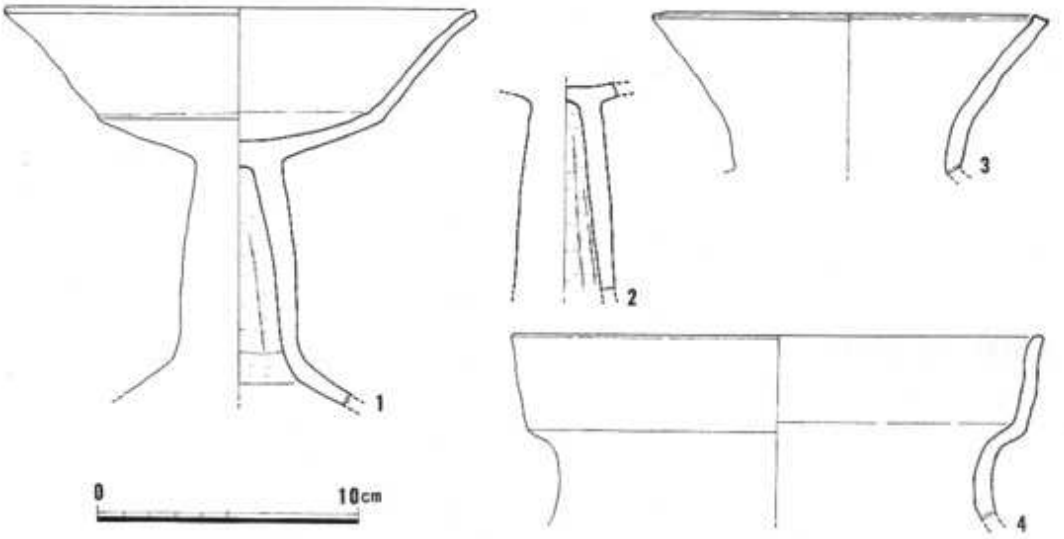
頭側棺外に、刃子が刃部を棺側に向けて副葬されていた。



第6図　2 号 墳 主 体 部 実 測 図（1/30）



第7図　3号墳葺石実測図(1/60)

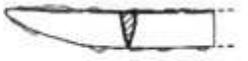


第8図　正恵古墳群出土遺物(1/3)

出土遺物（第8・9図）

壺（4）　口径20.0cmを測り、口縁は外反気味に直線的に立ち上がる。胎土は砂粒を含む、灰褐色で、堅緻な焼成である。

刃子　現存長4.1mを測り、中茎を欠失する。



第9図　2号墳出土鉄器(2/3)

(5) 3 号 墳

墳丘（第3・7図・図版9下）

調査時に円形墳であることを検出した。墳丘は削平され、周溝のみを検出した。巾約1.10mを測る。葺石は0.15～0.3m前後の礫石で築かれているが、若干動いている。

出土遺物は、土師器（壺）の少片が出土した。

主体部

発掘調査の発端となった石棺である。

Ⅳ ま と め

古墳群の特色

今回調査した古墳群の特色は次のとおりである。

1. 墳丘は、方形・円形を呈し、比較的低い墳丘墓であること。
2. 2・3号墳の主体部は弥生時代墳墓の伝統をもつものであること。
3. 副葬品は、2号墳の棺外副葬の刀子以外には出土せず、この時期にみる他の副葬品がみられないこと。
4. 周溝外縁及び周溝内に土師器（高杯・壺）が供献されていること。
5. 1・2号墳の周溝にみるように地山を掘下げ、墓域を区画していること。

古墳群の築造年代

各古墳に供献された出土土器より年代を比定できる。

1号墳出土土器は、他の器形の出土をみないが、布留期の特徴をもち、2号墳のそれも同様であり、3号墳出土土器は1・2号墳のそれよりも後出するものである。

また、古墳の選地的関連からみれば、1→2→3号墳という順で築造されたと考えられる。

よって、1号墳は4世紀終末～5世紀前葉に築造・埋葬され、時間的へだたりがなく、2号墳が、そして、やや時間をおき、3号墳が築造・埋葬されたとすることができる。

古墳群の問題点

正恵古墳群の特色・築造年代を上述したが、それより考えられる問題点を整理しておく。

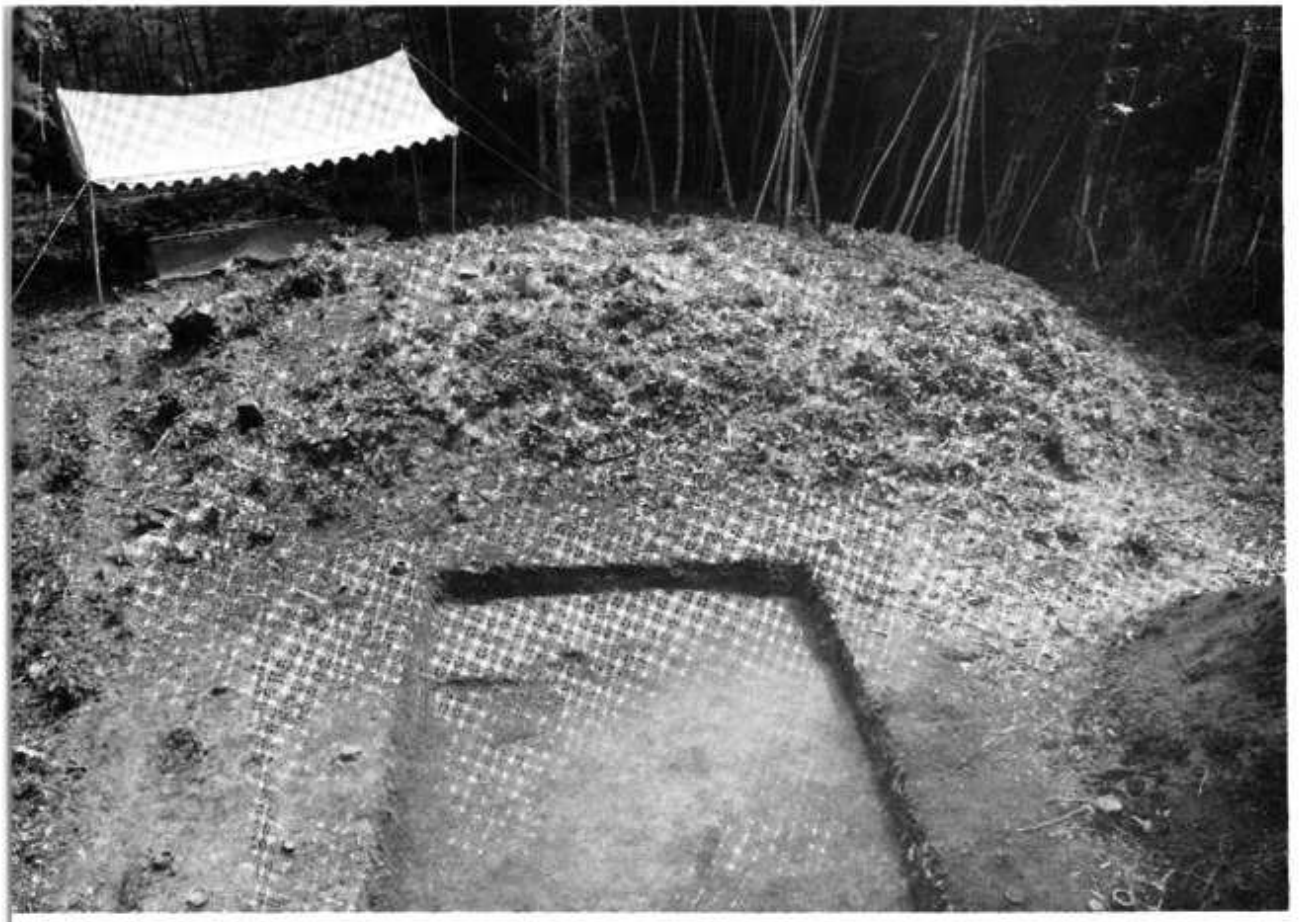
1. 古墳群は、急な斜面で狭長な丘陵の尾根上に立地するが、周辺には、ゆるやかな丘陵が存在する。このことは、墳墓の選地に制約的な意義を認めることができるのか。
2. 古墳群の主体部は、弥生時代の墳墓を継承し、在地性の強いものである。しかし、古墳群から一望できる三雲遺跡群には、前方後円墳である端山・築山・茶臼塚各古墳が存在するが、

端山古墳は、同遺跡群の調査のなかで、前方部先端が撥状にひらくもので、前期古墳の中で古い形態をもつ。このことから、三雲の３古墳は連続性のあるいわゆる「畿内型」古墳と考えてよいが、低墳丘墓である正恵古墳群の一部と高塚古墳である三雲３古墳の一部とは同時期に築造されている可能性がある。

最後に、今回の発掘調査に協力いただいた地主であり、遺跡の発見者の三苫新六郎氏の了解をいただき、正恵古墳群の０・１号墳は現地に保存できております。

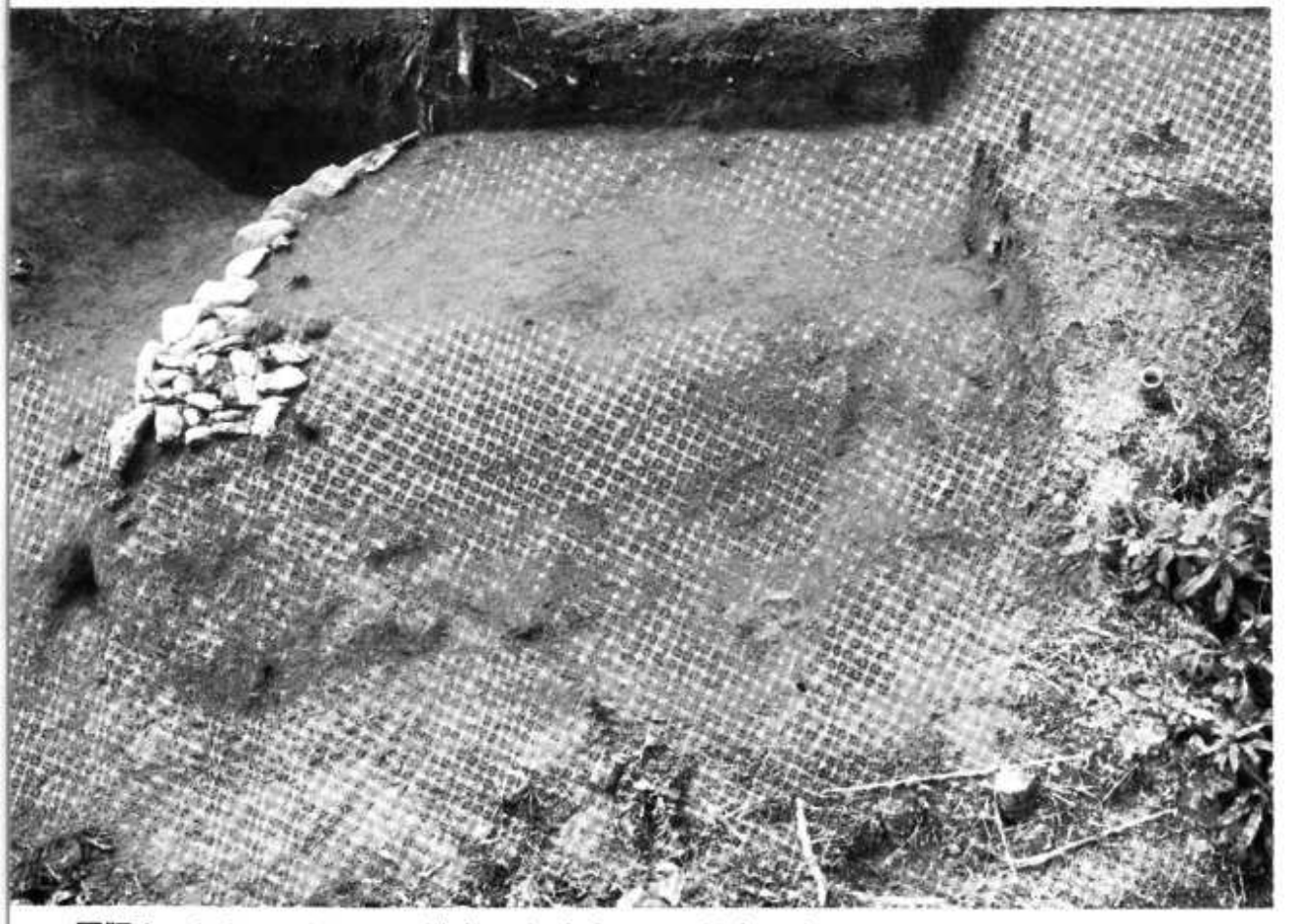
図　　版

図版 1　〔上〕正恵古墳群よりの怡土城跡遠景・〔下〕曽根丘陵遠景



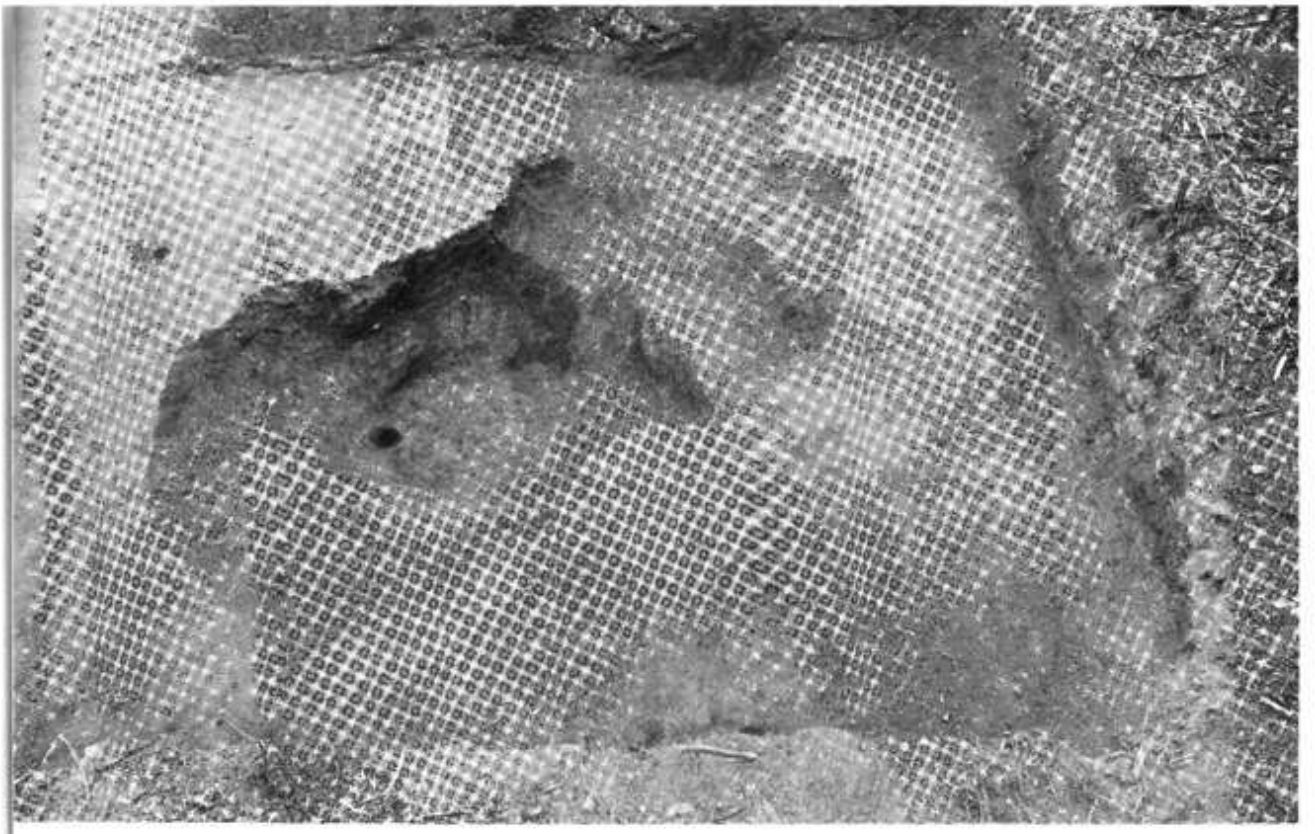
図版 2　〔上〕0号墳墳丘全景（南東より）・〔下〕0号墳横トレンチ近景（北西より）

図版 3　〔上〕1号墳墳丘全景遠景（南東より）・〔下〕1号墳墳丘近景（南東より）



図版 4　〔上〕1号墳葺石全景（南東より）・〔下〕同　上（北東より）

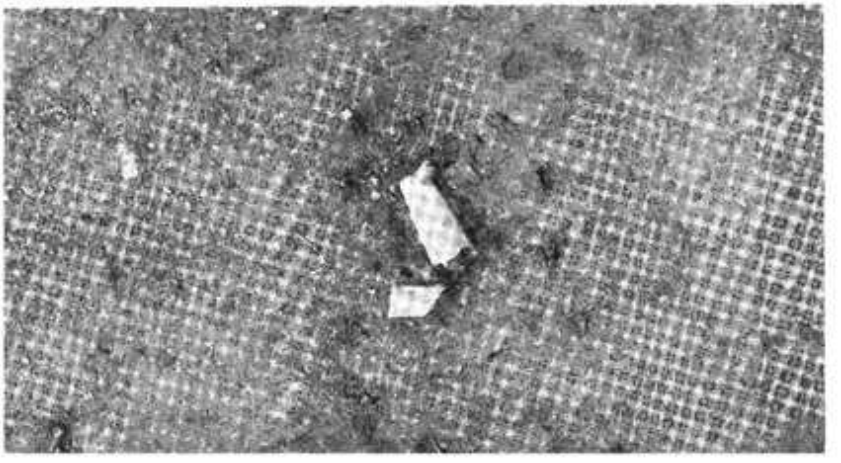
図版 5　〔上〕1号墳葺石全景（東より）・〔下〕1号墳周溝埋土状況及び周溝内出土状況



図版 6

〔上〕 1号墳墳頂部土坑
（北西より）

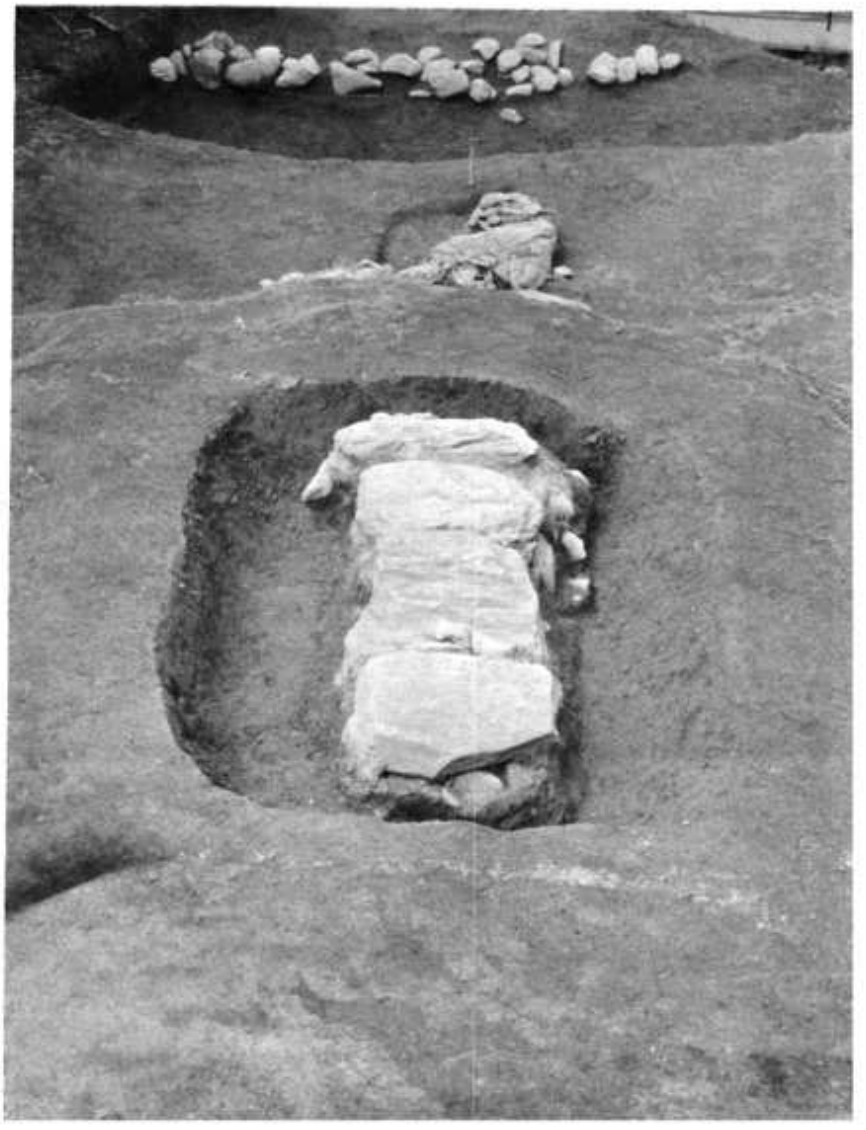
〔中〕 周溝内出土土器



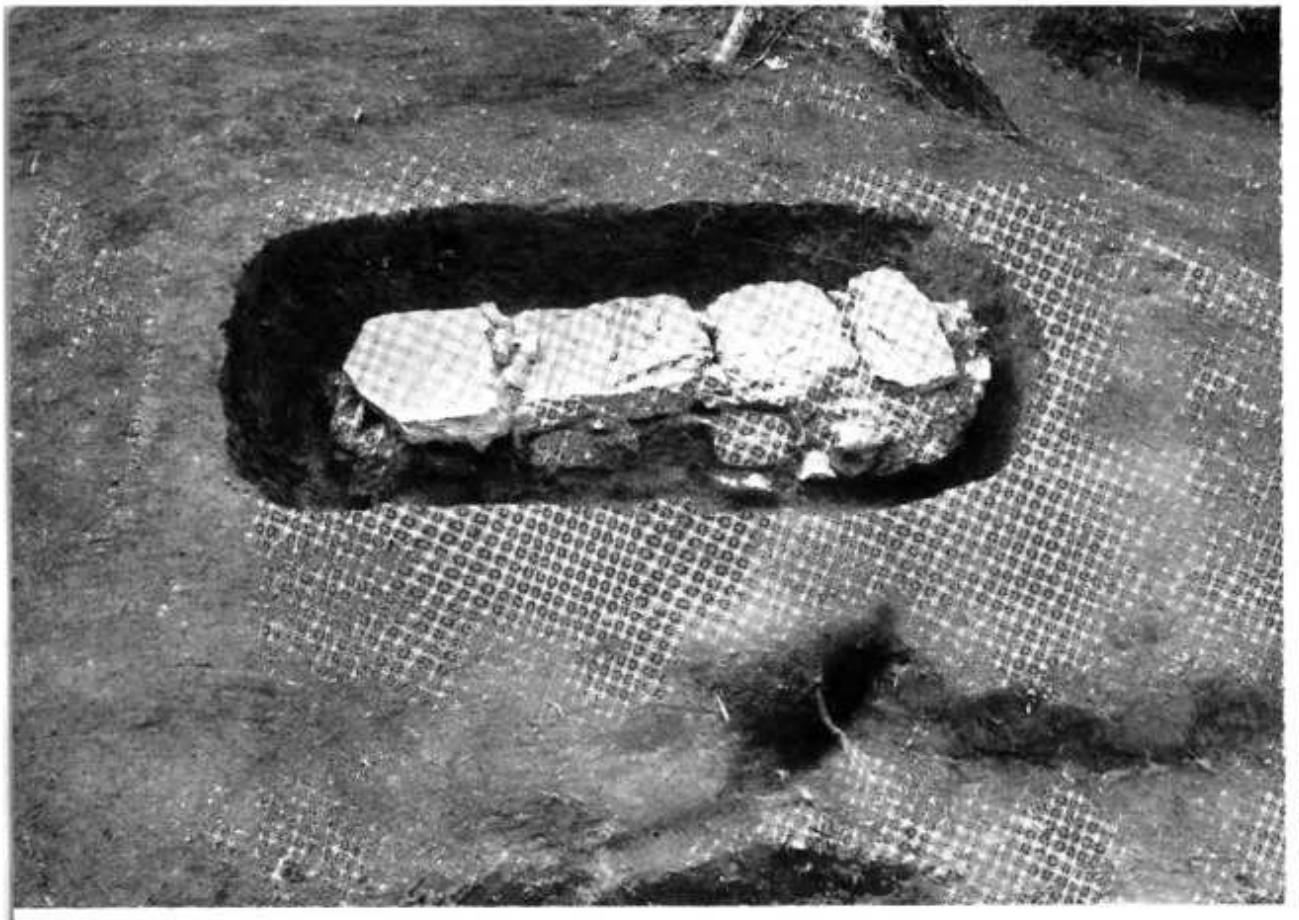
〔下〕 同　上

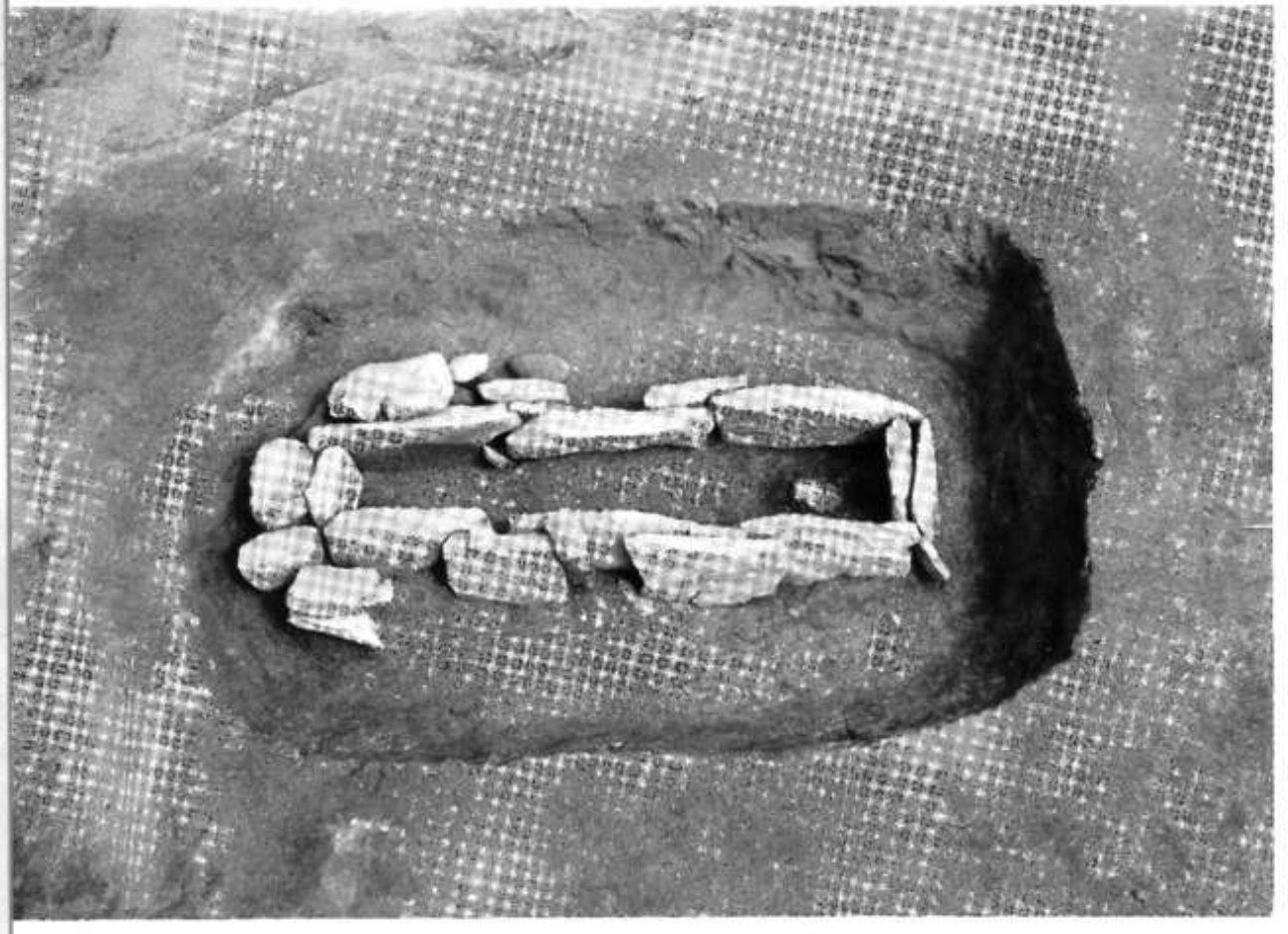
図版 7

〔上〕2号墳墳丘全景（東より）



〔下〕2号墳主体部近景（南より）



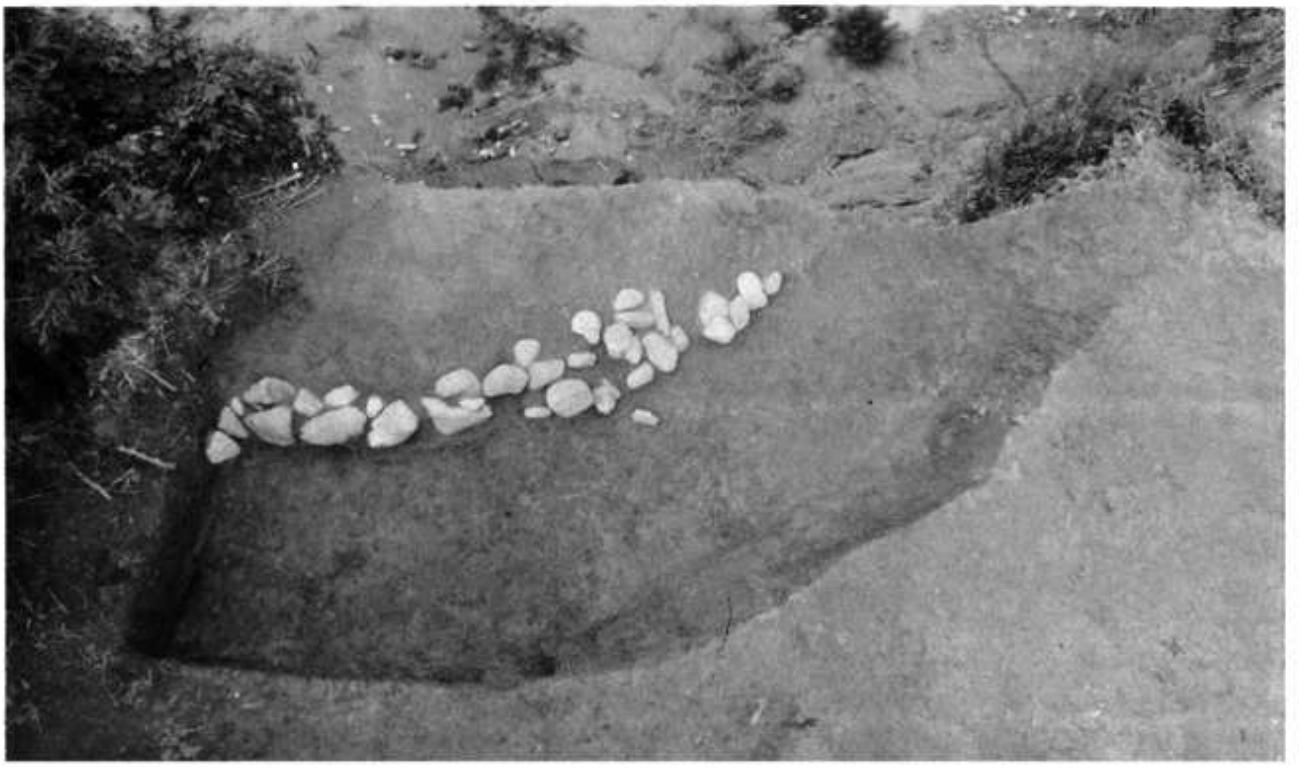


図版 8　〔上〕2号墳主体部近景（東より）・〔下〕同　上（西より）

図版 9

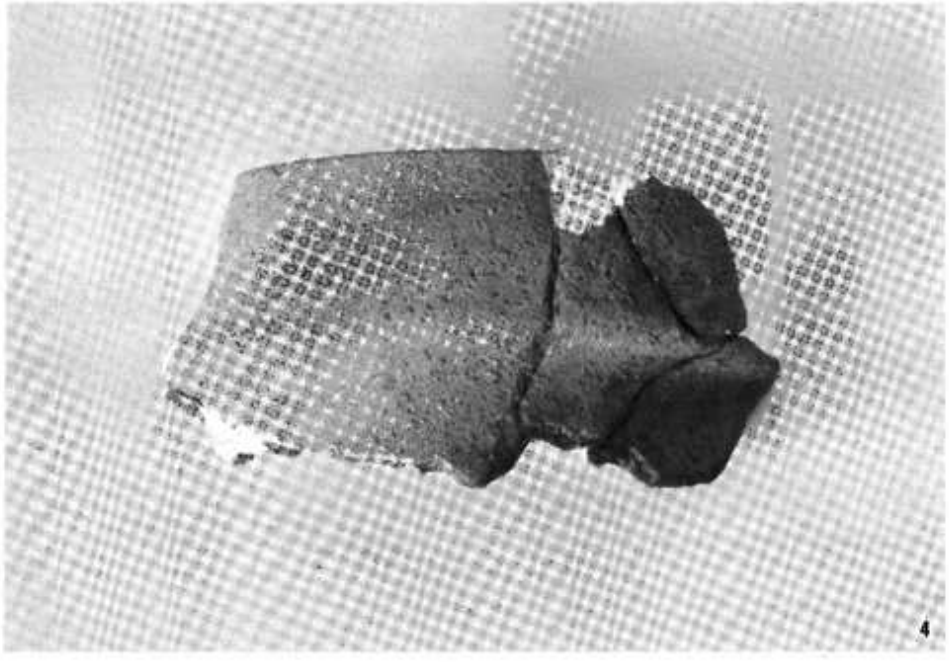
〔上〕 2号墳主体部近景
（北 より）

〔下〕 3号墳葺石出土状況
（南 より）



図版10

1号墳周溝内出土土器



2号墳周溝内出土土器

正恵古墳群

昭和55年3月31日

発行　前原町教育委員会
福岡県糸島郡前原町大字前原623

印刷　青柳工業株式会社
福岡市中央区渡辺通2丁目9の31